

heisei16

# 六花

*Rikukwa haikukai*

6

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba  
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki  
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana  
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho  
風 ohdako no orikite kusa no iro to naru  
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura  
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku  
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi  
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana  
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka  
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri  
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryoyaku ni

*designed by Asuka*

訪  
戴



山田六甲

麦  
秋

夕暮れの紫雲英田に犬噛みあへる  
春泥を駆けて来て犬抱きつきぬ  
大雨の博多どんたく湯屋泊り  
若葉雨血のつながらぬ叔母見舞ふ  
火の國の水が美味しよ鯉のぼり  
牛の毛を梳いて艶増し青葉風  
だご汁をすすする八十八夜かな

青芝に替りかけなり草千里  
噛み切れぬ馬刺一切れ肥後椿  
蝸牛渦をたどればビツグバン  
夏わらび址とは何も無きところ  
掬はれて水の嫌ひな金魚かな  
切り株が猿に見えたり栗の花  
新茶淹れ父と娘にもどりけり  
麦秋や畳破れて母住まひ

御神体

鳴 海 清 美

石 庭 の 滝 に 一 輪 落 椿  
こ の 蔵 に 百 の 能 面 牡 丹 の 芽  
大 寺 の 蘇 鉄 の 艶 も 二 月 な り  
下 萌 に 湿 り て 石 の 御 神 体  
は や 傷 を 磯 の 霊 屋 の 白 椿

更衣

中 村 房 江

さ み し さ の 膝 そ ろ へ た り 更 衣  
人 声 に 昂 ぶ る 犬 や 棕 櫚 の 花  
麦 秋 の 畳 に 足 を 放 り 出 す  
曇 り 日 の ひ と り こ こ ろ や 業 平 忌  
十 葉 や 蹴 り た い 石 の 一 つ も な く

頑固親父

松 山 律 子

母の日の母が選り出す不要品  
父の日のわしの頑固は親譲り  
木の国の友は黄泉青葉木菟  
梅雨入前健康診断再検査  
せつかちなおれに纏うな道おしえ

葦の角

二 瓶 洋 子

声のして白鳥の群遙かなり  
水漬く枝の音生み春の川となる  
春セーター胸のさびしくなりぬたる  
夫起きる気配朝寝をしてをれず  
葦の角紀元前より揺れてをり

# 芯という臓器はあらず春の海

中野 哲子

潮風に吹かれ菜の花列車行く

菜の花や足の裏より川育ち

押入の襖鳴らして春疾風

失念の淀みなきまで春の水

あの人は「芯が強い」とか言うけれど、心が心臓かといえばそうでなく、脳みそかというところでもなく、例えば脳みそ（頭脳）だとすると、恋愛などで心臓がドキドキしたり、一体何処にあるんだろう？とよく考えたっけ。これは大きく哲学のことに踏み込まなければ解決できない問題で、いやいや哲学では解決出来ない問題であります……。などなど本当に「芯」などという臓器は存在しないのであります……。と春の海をながめながら……。

# 楳木集



磐梯山

田中 武彦

磐梯より高き屋根より雪卸す  
雪だるま今もバケツの帽子なる  
風糸をたぐり磐梯引き寄せる  
西洋の雪達磨には手足あり  
荒波をやりすごしたる浮寝鴨

桜まじ

武田 美雪

桜まじ暗証番号吹きとぼす  
細胞に花の記憶ありや弥生尽  
白足袋の老女の背筋梅若忌  
花の雨その枝垂れにはかるく降る  
春愁ひ似合はぬ年なりにけり

菜の花列車

中野 哲子

潮風に吹かれ菜の花列車行く  
芯という臓器はあらず春の海  
菜の花や足の裏より川育ち  
押入の襖鳴らして春疾風  
失念の淀みなきまで春の水

菜の花

西塚 成代

草餅

馬場美智子

菜の花や心配の種なくならず

不揃いの草餅並ぶおやつ時

緘黙に卒業証書書き直す

春一番バイトの募集旅の記事

靴箱に片方の靴卒業子

花粉症甜茶が効くと持ち歩き

陽はひとつ百万本の黄水仙

確定申告終えて梅林のぞきけり

洋食器白で統一春の朝

梅開き始めた夜の雨嵐

春宵

西村 咲子

セーター

松下 幸恵

畑中の白梅紅梅光満つ

善い方に話を向けて春の椅子

庭雀流るゝ読経沈丁花

春蘭をひつくり返してネコ逃げる

節々の痛み増し来て芽立時

どの角もくぎ煮の匂ふどの角も

春宵や猫の寝息を聞き乍ら

無敗と書くセーター着た子ころびけり

春泥や遊び疲れて猫戻る

春セーター見失なはずについて行く



# 六花集

會員自選

出口 誠

髪留めに桜咲かせて酒の席  
のどかさやかういふ時代だからこそ  
学校に未練ありけり梅雨晴間  
和らぎを以て貴き螢かな  
先輩は白と黒なり更衣

永田 勇

平居 濤子

臃かな行方不明の左足  
辻辻の四方から匂ふくぎ煮かな  
幼子の指さす方に地虫出づ  
星影にこたへ艶ます辛夷かな  
うららかなや石のせせらぎ聞いてをり

哲学をすること忘れ恋の猫  
雪解けて世俗の中へ紛れ込む  
紅き夜具広げ干すごと梅の家  
親孝行といふ野遊びに日が暮れて  
生と死を問ふ春寒の写真展

## 菜根譚



六甲

先輩は白と黒なり更衣

出口 誠

この句も解釈次第で左右に分かれる作品。一つは「先輩の衣服が白と黒のものを着用している」というもの。もう一つは、「先輩は物ごとの考えが二極で、中道の考えがない人というもの」。やはりこの句は後者が優れていて、また、「先輩が白といえは黒い物でも白である」という理不尽がまかり通る、縦社会意識なども思わせて、作品が深くなるのではないか。

親孝行といふ野遊びに日が暮れて 平居 滯子

掲句もやはり二つに解釈が分かれる作品。」つは「作者が親を野遊びに連れて行った」もう一つは「作者が子供たちに野遊びに連れて行ってもらった」解釈は二つ成り立つが子供が親孝行を野遊びという形で実現したことは一つの事実であり、日暮れまで楽しく遊んだことも一つの事実である。つまり親孝行を野遊びという形で実現したことを一句に述べたのが良いのである。この句の場合、二つの解釈をどちらにしても作品価値は変わらない。

臃かな行方不明の左足

永田 勇

これはさて、難解な句と言わねばなるまいが、難解でなくするための方法としては解釈を読者側に引きつけてみるのだ。例えば人形の片足とか、虫の片足とかにすればいいことなのだ。しかしそれだけだろうか？ 難解の方向で解釈すれば、作者の左足の感覚が支障を来しているという解釈も成り立つだろう。それが臃なのだ。私なら後者を採る。

